

2024・8月

◎発行 近畿文化会事務局 ☎543-0001 大阪市天王寺区上本町6丁目5番13号 上本町YUFURA7階 TEL 06-6775-3686  
 編集・発行人 中野尚彦 令和6年8月1日発行(毎月1回1日発行) 定価 300円 無断転載・転用禁止

## 大友皇子 — 敗者から見た壬申の乱 —

遠山美都男

### 序、大友皇子の即位の正当性

古代最大の内乱と言われる壬申の乱で敗者となった大友皇子は、天智天皇の皇子でありながら本来的に皇位継承権が認められておらず、内乱に敗れ去ったのもそのためであると見做すのが有力な見解となっている。しかし、それは壬申の乱を勝者である天武天皇(大海人皇子)の立場から描いた『日本書紀』をもとに、その叙述をほとんど鵜呑みにして導き出された認識にすぎない。本稿では『日本書紀』に徹底的な史料批判を加え、大友皇子に実際には即位の正当性があったこと、それゆえに彼が内乱の勝者となりうる可能性もあったことを確認したい。

一、齊明女帝を受け継ぐ「天智天皇の皇位継承条件」  
 中大兄皇子こと天智天皇(以下、「中大兄皇子」「天智天皇」を適宜使い分けて記す)が母である齊明天皇の後継者であることは、敏達天皇の皇統の正嫡という点で早くから決まっていた。だが、天智二年(六六三)の白村江の戦いで唐・新羅の連合軍に敗れ、外敵侵入の危機が高まったことに

より、正式な即位を先延ばしにせざるをえず、天智七年(六六八)正月に近江大津宮(滋賀県大津市)で即位するまで、いわゆる「称制」(正式に即位せずに王権を行使すること)を続けることになったというのが定説となっている。

しかし、中大兄皇子が称制をはじめたのは、白村江の敗戦より約二年も前の齊明七年(六六一)七月のことであり、白村江の戦いの敗北自体が直ちに中大兄皇子の正式な即位を延期させたわけではない。およそ六年の長きに及んだ中大兄皇子称制の意義は、即位の道を開いた齊明天皇との関係性を問い直すことによって明らかにすることが出来ると考える。即位までに長期にわたる称制期間をおくことは日本史上この前後にしか見られず、天智天皇の事例に加えて、その皇女であった持統天皇の二例しか確認出来ないことが留意

される。その意味で、称制とは天智天皇とその皇統に固有の皇位継承システムであったと言える。

齊明天皇は、その在位中において、將軍阿倍比羅夫を起用した北方遠征(東北・北海道地方への軍事行動)と百濟遺臣の要請による百濟救援戦争という内外の大規模な戦争に踏み切っている。それはすでに齊明天皇後継の座が確定している中大兄皇子のために、より広大な支配領域を確保することを企図した軍備拡大路線であった。北方遠征は、齊明天皇健在のうちに一定の成果を上げたが、百濟救援戦争は齊明天皇の生存中には決着が付けられなかった。したがって、齊明天皇の跡を継ぐ予定の中大兄皇子としては、齊明天皇の未完の軍拡路線を受け継ぐことが、不可欠の即位条件と見做されたに違いない。中大兄皇子が結果的に六年余りにわたる称制を続けることになっ



大友皇子像(大正11年) 所蔵 法傳寺  
 写真提供 大津市歴史博物館